

大学生のうつ病；リストカット

濱元淳子 Hamamoto Junko 日本赤十字九州国際看護大学

リストカットの事例を もとに

Aさん(19歳、女性)は、F市内の有名私立大学に在学中の女子大生だった。自宅の洗面所でリストカットし、放心状態で座り込んでいるところを母親に見つかり、救急搬入された患者だった。ERに搬送される患者のなかには、Aさんのような自殺企図の患者は少なくはない。しかし、Aさんがほかの自殺企図の患者と異なっていた点は、リストカットに至るまでの数カ月間に、数回のER受診歴があったことである。この数回の受診中、偶然にもすべての診察介助に筆者はかかわっていた。今、思い返すと、Aさんは初回の受診時から、筆者たち医療スタッフにSOSを出していたのではないだろうか。また、心療内科へのコンサルテーションを早期に行っていたら、Aさんのリストカットを未然に防ぐことができたのではないだろうか。ER勤務を離れ数年たった今でも、時折Aさんを思い出し、このような思いに駆られることがある。今回、Aさんへのかかわりについて1度目の受診から振り返り、考えてみたい。

Aさん1度目の受診

1度目の受診は、5月上旬、Aさんが大学に入学し1カ

月を過ぎたころだった。数日前から上腹部の不快感と嘔気が続いているとのことで、両親とともにERを受診した。検査希望があり、腹部単純撮影を行ったが問題はなかった。制酸剤が処方され、症状が続くようならば消化器内科を受診するようにと指示が出た。このときのAさんは、ごく普通の19歳の娘さんという印象で、顔色がよく、消化器症状を訴えてはいるものの、とても元気そうに見えた。

Aさん2度目の受診

1度目の受診から2、3日たったころ、Aさんは、再び両親とともにERを受診した。このときの症状は、前回の症状に加え、食欲不振、頭痛、倦怠感といったものだった。診察介助に入った際に感じたAさんの印象は、娘を心配し、興奮気味であった両親とは裏腹に、すべてに無気力、無関心といった様子で、1度目の受診時とは、まったくの別人に見えた。1度目の受診時と異なっていたのか、思い起こしてみても上手く表現することはできないが、「明らかに何か違う。何かおかしい」という気持ちであった。たった2、3日の間に起こったAさんの変化に、筆者は正直なところ大変驚いていた。何がAさんに起こったのか両親に尋ねたかったが、そのチャンスがなかった。また、直接Aさんからも話を聞きたかったが、やはりチャンスがなかった。

診察中、医師の質問に返答したのは両親だけで、Aさん

自身は答える気すらないように見えた。本人抜きで進んでいく診察に対し、筆者は、Aさん自身に返答してもらいたいと思った。Aさんとアイコンタクトを取ろうと努力したが、視線は一度も合わなかった。また「Aさん、どうですか?」と直接返答を促したが、答えは返ってこなかった。

過保護な両親と、わがままな一人娘という構図には、違和感があった。しかし、この2度目の受診では、「大学に入学したばかりで、環境の変化などから精神的に参っているのかも。無理をせずに休みを取ることも必要」という医師の指示のみで帰宅となった。

Aさん3度目の受診

その後、2週間ほど経過した5月下旬、再びAさんは両親に付き添われERを受診した。母親の話によると、前回の受診から数日間は、大学を休み自宅で休養していたとのことだった。しかし、学業が遅れることを懸念した父親に促され、大学へ行ったものの、その後からAさんの状態が悪化したという。Aさんの状態は、四肢の脱力が顕著で、動作緩慢、無言、無表情といったものだった。また、食欲不振が増悪し、ここ数日は拒食状態であった。「栄養が不足しているので、点滴をしてほしい」「夜も眠れていないようなので、睡眠剤を出してほしい」というのが両親の希望であった。

筆者は、母親の話を聞きながら、これらの身体症状は、明らかにメンタル面のトラブルで発生したものであると感じていた。そして、その原因は大学と家族であろうことも感じ取っていた。しかし、たとえそのアセスメントが正しかったとしても、Aさんにどのような看護ケアを提供できるのか、正直なところわからなかった。ただ一つ、一日でも早く心療内科を受診すべきであることだけはわかっていた。救急医も同様の意見だった。

筆者は、Aさんが点滴処置を受けている間に、医師から両親への病状説明の場を設けた。ゆっくり落ち着いて話ができる場所を確保したかったが、すべての診察室、面談室が使用中であったことと、観察の必要がある患者が多く、処置室から離れられなかったこともあり、処置室に続くフロアの片隅での立ち話となった。医師は、Aさんがうつ状

態にあり、心療内科へ受診させる必要があることを両親に説明したが、母親は、Aさんの症状は、心の問題ではなく体の問題であると認識しており、医師の説明に納得していない様子であった。しかし、筆者は、母親はAさんの状態をこころの底では理解できているが、ただそれを認めたくないだけではないかと直感的に感じていた。筆者は、本心はどのように考えているのか、両親からゆっくり話を聞きたいと思ったが、他患者への処置などに追われ、まったく時間が取れなかった。また、Aさんをそのまま入院させ、翌日、心療内科を受診してもらおう計画を医師とともに立てたが、ベッドが満床であったため、点滴終了後、そのまま帰宅となった。

Aさん4度目の受診

3度目の受診から1カ月ほどたったころ、Aさんは、自宅の洗面所でリストカットし、放心状態で座り込んでいるところを母親に発見され、救急車で搬入された。筆者は、ホットラインでAさんの名前を聞いた瞬間から、「えっ、なぜ」という思いと「ああ、やっぱり」と相反する思いを感じていた。来院した母親に心療内科を受診したのか確認したところ、3度目の受診から数日後には、通学できるほどにAさんの症状が改善したため、受診させていないとのことだった。Aさんは、左手関節をカミソリで切りつけており、幅4cmの大きさで、深さは2~3mm、動脈性の出血はなかった。傷の縫合は2年目の研修医が行った。縫合の介助につきながら、筆者はAさんと同年代であったころの自分自身思い出していた。19歳という若さで、自殺まで企てたAさんの気持ちはわからなかったが、「ああ、これもうつ病によるものだ」とすぐに感じた。同時に、筆者自身が、うつ病に対する認識に欠けていたことにも気がついた。

Aさんとの関係を振り返って

1度目の受診時、Aさんはごく普通の女子大生に見えた。19歳と若く、パッと周囲を照らすような明るさがあった。しかし、一見元気そうに見えた外見に筆者は囚われていたのだろうか。主訴であった上腹部の不快感と嘔気が、胃炎などから起こる身体症状なのか、うつによる身体症状なのか、今でも判断することはできない。しかし、2度目の受診時は、Aさんから明るさが消え、周囲に影を落とすような暗ささえ感じた。Aさんが1度目の受診時と異なる状態であったのは明らかである。

筆者は、Aさんの変化について、両親に思い当たることはないか話を聞いたかったが、そのチャンスがなかったと振り返っている。しかし、今、思い返すと、あえてそのチャ

ンスを作らなかった気もしている。なぜならば、筆者自身が、何をどのように聞き、その返答にどのような言葉かけをしてよいか、あの時点では、まったく予想がついていなかったためである。対応のノウハウがないばかりに、話しかけることを躊躇したことが、Aさんへの対応を遅らせてしまったと考えられる。筆者は、この2度目の受診時に、心療内科を勧める必要があることを医師に報告すべきであったと後悔している。

Aさんの事例から、これまで救命してきた自殺企図の患者のなかにも、事前にうつに伴う身体症状を呈する患者がいたと推測できる。しかし、うつ症状が実際の身体症状に隠れている場合は、発見が遅れてしまうことがほとんどではないだろうか。ERという滞在時間が限られた状況や、緊急度に配慮した多重業務のなかであっても、うつ症状を呈する患者のサインをキャッチし、早急に対応できるスクリーニングシステムの構築が自殺防止の鍵になると考える。

第16回日本糖尿病教育・看護学会学術集会

- 会期：2011年9月24日(土)・25日(日)
- 会場：東京ビッグサイト(東京都江東区)
- テーマ：糖尿病看護ネットワーク
- 会長：福井 トシ子(社団法人日本看護協会常任理事、元杏林大学医学部付属病院看護部長)
- プログラム：会長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、特別プログラム、一般演題、交流集会ほか
- 事前参加登録期間(予定)：2011年5月10日(火)～8月1日(月)
 - *1 事前参加申込みは、PC用HP、携帯用HPからオンラインで受付いたします。
 - *2 ランチョンセミナーは事前申込み制です。事前参加登録に続き、オンラインでお申込みください。
- 参加費：【会員】事前：8,000円、当日：10,000円

【非会員】事前：10,000円、当日：12,000円
【学生(大学院生含む)】事前：4,000円、当日：5,000円

- 問い合わせ：
第16回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 運営事務局
〒100-0013 東京都千代田区霞が関1-4-2
大同生命霞が関ビル18階
日本コンベンションサービス株式会社
メディカルカンパニー本社グループ
TEL：03-3508-1265 FAX：03-3508-1302
E-mail：jaden16@convention.co.jp
URL(PC)：http://www2.convention.co.jp/jaden16
(携帯)：http://www.jaden16.com

(QRコードをご利用ください)

